

《京都》御所と離宮の栞 ～其の二十五～



京都御所の防災－過去と現在－



京都御所は、度重なる火災や地震などによる災害に遭いながらも、その度に復興、修復されて今日に至っています。今回は、現在の御殿が造営されたきっかけとなる嘉永の大火での出来事をはじめ、京都御所における災害、防災をテーマにしてお届けします。

◆ 嘉永の大火と救出された品々

嘉永7年(1854)4月6日昼頃、京都御所南東の方向に黒煙が立ち上がりました。火元は後院北殿ごいんきたどの(現在の京都大宮御所の場所)で、梅の木におびたしくついた毛虫を竹の先に藁をつけて焦がしていたところ、飛び火して建物の屋根に火がついたことが原因でした。

この火災は風に煽られ、京都御所へと燃え広がり、御殿群を焼失させるにとどまらず、京都御所から西約2kmの民家までもを襲う被害規模の大きなものとなり、嘉永の大火と呼ばれています。

この火災により、京都御所は紫宸殿、清涼殿をはじめ殆ど全ての御殿が焼失しました。残ったのは、土蔵や泉

殿(4頁)程度という大きな被害で、更に、その建物内にしつらえられていた障壁画や調度品の大半も焼失し、それまで御所の造営、整備に注ぎ込まれてきた朝廷や幕府、大工や絵師など先人達の努力が一日にして失われてしまいました。

しかし、この大火を潜り抜け、焼失を免れた重要な品々が現在も大切に保存されています。紫宸殿の賢聖障子(写真:左下、[栞其の二十一](#))や清涼殿(写真:右下)の鳥居障子、獅子狛犬([栞其の五](#))、飛香舎の鳥居障子([栞其の三](#))など、宮中に仕えた者達の決死の覚悟によって持ち出され、今日まで継承されているものがあります。



住吉広行作 嘉永の大火後に修復された「賢聖障子」(寛政度) 収蔵施設で保管中

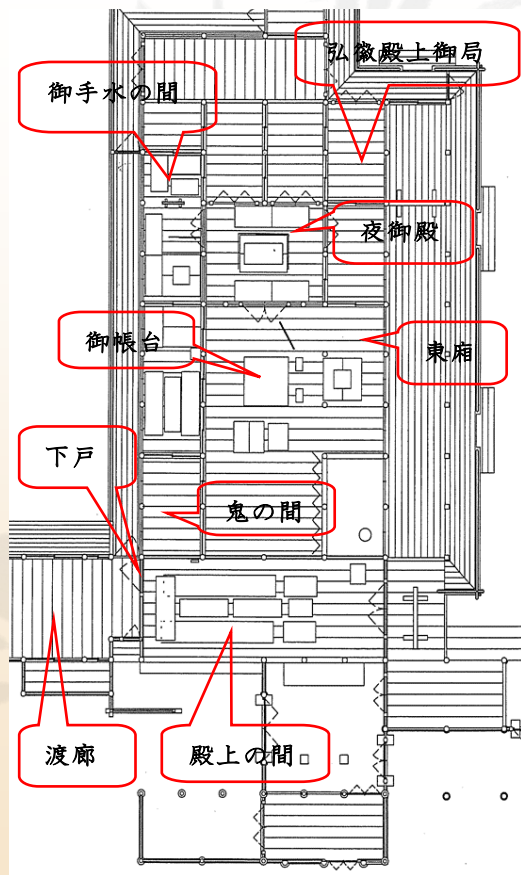


清涼殿

火災の際に出仕した地下官人の調書を載せる史料『御炎上ニ付出仕覚書(嘉永七年、書陵部蔵)』には迫り来る火災から清涼殿の調度品を救出していく地下官人達の様子が記されています。その内容^{みくらことねり}を御蔵小舎人正恒の調書を中心にご紹介します。

所々に煙が立ち上っている京都御所に到着した正恒は、紫宸殿に火がかかり、清涼殿にも火の手が迫る中、清涼殿東廂、鬼の間、御手水の間などの^{ひくろうどぐち}部戸を跳ね上げ、御簾を巻き、通路を確保していきます。周囲に人がおらず、非蔵人口(御車寄の近くにある通用玄関)に行き、非蔵人(殿内の雑務を勤めた者)にこれから清涼殿の調度品を搬出することを伝え、そこにいた同じ御蔵小舎人である生春と共に清涼殿へと戻り、夜御殿にある大宋^{こきでんのうえのみつぼね}屏風を運び出し、ついで弘徽殿上御局に保管してあった調度品を一度に数箱も抱えながら、殿上^{しものど}の間と渡廊の間に開く下戸付近まで搬出しました。

しかし、残った箱は、一人では持てない大きな箱です。何とか数人の人を見つけ出し、再度弘徽殿上御局に戻りますが、正恒の袖が焦げるほど、火の手はすぐそばまで迫っており、かろうじて御脇息を搬出しました。



清涼殿内部

黒煙が更に増す中、正恒は御蔵小舎人で自身の子でもある孝正と、所衆の栄柄と共に母屋の御帳台を解体しようとしたましたが、母屋はすでに危険^{とばり}な状態となっていたため、御帳台にかけられた帷を引き落とすのみで、解体は叶いませんでした。

救出された品々は、ひとまず神嘉殿南の広庭(現在の新御車寄前)にまとめられ、ついで建礼門南側の凝花洞に搬出されました。また正恒は、賢聖障子、年中行事障子や鳥居障子などが蛤御門南の修理小屋に持ち込まれているのを確認しています。

また、上記の生春ほか、他の地下官人の調書も残されており、それらによると獅子狛犬(写真:右下)を抱えながら走る者を避難活動前に見かけていることや、生春は正恒が最初に剣璽案一脚、獅子狛犬の台のみを搬出したと述べていることから、火災初期の段階で獅子狛犬は搬出されていたと考えられます。一度燃えだすと消火するのが難しかった時代、迫り来る炎から宮廷文化を守るため、調度品を救出した官人達の決死の覚悟が伝わってきます。



鳥居障子



狛犬



獅子